

## 研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-151	A-210	14-119	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>			
Alcohol consumption patterns and cognitive impairment in older women. 高齢女性における飲酒パターンと認知機能障害			
<b>執筆者</b>			
Hoang TD, Byers AL, Barnes DE, Yaffe K.			
<b>掲載誌</b>			
Am J Geriatr Psychiatry. 2014 Dec;22(12):1663-7. doi: 10.1016/j.jagp.2014.04.006.			
<b>キーワード</b>			<b>PMID</b>
認知機能障害、認知症、飲酒			24862680
<b>要 旨</b>			
<b>目的：</b> 飲酒量の変化と超高齢者の認知機能障害リスクについて調査した研究は少ない。本研究では、80～90代女性のコホートにおいて、飲酒量の変化と認知機能障害の長期的な関連性について検討した。			
<b>方法：</b> 前向きコホートであるStudy of Osteoporotic Fractures (SOF)研究に続いて行っているWomen Cognitive Impairment Study of Exceptional Aging (WISE)研究において、飲酒量や認知機能検査のデータが揃っている65歳以上の1,309名を対象とした。飲酒量は繰り返し訪問して評価し、16年間の平均飲酒量の変化を推定した。臨床的に有意な認知機能障害（軽度の認知機能障害と認知を含む）を追跡20年目の時点で評価した。ロジスティック回帰分析で、飲酒変化量毎の認知機能障害のオッズ比（95%信頼区間）を算出した。			
<b>結果：</b> 週0～0.5杯程飲酒量がわずかに減った群（全体の60.4%）を対照群としたが、飲酒量増加（少しでも増えた場合はすべてここに含む、全体の5.0%）は、認知機能障害のリスクと関連を認めなかった（オッズ比：1.00、95%信頼区間：0.54-1.85）。一方、週0.5杯以上の飲酒量の減少（全体の34.5%）は、有意に認知機能障害のリスクが増加していた（オッズ比：1.34、95%信頼区間：1.05-1.70）。年齢、教育歴、糖尿病の有無、喫煙状況、BMI、身体活動を調整したところ、その効果は、統計学的有意差があるとみなされる境界域まで、わずかに弱まった。			
<b>結論：</b> 80～90代女性において、飲酒量が減った人は認知機能障害のリスクがある可能性があると考えられた。			